

[論文]

『ペトロの第一の手紙』研究 (1)

—— 構造と内容, 成立状況について ——

吉 田 新

はじめに

1. Iペトロ書の構造と内容
 2. Iペトロ書の著者, 成立時代・場所, 受け取り手について
- まとめ
-

はじめに

戦後70年目を迎える今年、過去の歩みを今一度思い起し、検証する重要な節目の時である。戦時中、多くのキリスト者が国家権力に屈し、戦争遂行に加担した歴史を覚え、二度と同じ過ちを繰り返さないことを心に刻むことが日本に住まうキリスト者に求められている。かつて、国家権力に従うことを正当化する論拠として、ロマ書13章1節以下と並んでIペトロ書2章13節以下の言葉も引用された¹。「あらゆる人間的制度に従え」、「王（皇帝）に従え」。地上の権力への盲目的従属を命じるこれらの言辭は、戦時下の日本のキリスト教会のみならず、歴史上、様々な形で世俗的権威を正当化し、それに従わせる口実を人々に与えた。「正典」に含まれる文書にも、字句通り受け取るには抵抗を抱かざるを得ない言葉が多々見出される。それゆえ、過ちを繰り返さないために、権力への服従を命じるこれらの言葉を批判的に検討する必要がある。とりわけ、「歴史が逆戻りしている」(ウンベルト・エーコ)と思わせる昨今の日本の政治、社会状況を鑑みる時、その作業の必要性を強く感じる。そのひとつのとば口として、ここでは『ペトロの第一の手紙』を取り上げたい。本書簡の解説を通して、成立事情、思想（神学）的特徴、歴史的意義を検証する。

¹ ロマ書13章をめぐる戦前、戦中の日本人キリスト者と国家との関係については、以下の書物に詳しい。宮田、2003年。

この書簡の送り手は使徒ペトロ（Iペト 1: 1）とあるが、特定の受信者の名前はない。広い範囲の受け取り手に宛てられた回状であり、ヤコブ書などと同じく公同書簡の一つに分類されている。Iペトロ書は初期キリスト教において、比較的広範囲に読まれていたことが使徒教父文書から確認できる²。送り手はペトロとあるが、果たして使徒ペトロによって執筆されたのだろうか。ペトロではなければ、いかなる人物の手によって記されたのだろうか。本稿では、今後の研究の基礎固めとして、書簡の構造と内容、送り手と受け取り手、成立年代と場所について考察する。

1. Iペトロ書の構造と内容

1.1 書簡の構造

- i 挨拶（1: 1-2）
- ii 第一部（1: 3-4: 11）「教え」と「勧告」
 - a 教え ① 救いの意味（1: 3-12）
 - － 希望へと新たに生まれること（バプテスマ）の意義（1: 3-5）
 - ⇔ 3: 21 と対応
 - － 試練の中での喜び（1: 6-9）
 - － 救いとは何か（1: 10-12）
 - 1: 13「それゆえに（Διὸ）」…
 - b 勧告 ①（1: 13-2: 10）キリスト者への一般的な勧告
 - － 希望を置き（1: 13），聖なるものとなれ（1: 14-16）
 - － 贖いの業の意味を知り，畏れをもって生活せよ（1: 17-21）
 - － 互いに愛し合いなさい（1: 22-25）
 - － 霊の乳を求めよ（2: 1-3）
 - － 生きた石として霊的な家を造れ（2: 4-10）

² 例えば、2世紀のスマルナの司教ポリュカルポス（後69-155年）の『フィリピ書』1: 3, 2: 1, 8: 1, 10: 2 他で引用されている。他にもエイレナイオス『異端反駁』IV: 9: 2。ただし、ムラトリ正典目録にはIペトロ書は含まれていない。

c 勧告 ② (2: 11-20) 具体的な勧告

「私は勧める (παρακαλῶ)」(2: 11) ⇔ 5: 1 対応

「愛するものたちよ (Ἀγαπητοί)」⇔ 4: 12 対応

- － 異教徒の模範となれ (2: 11-12)
- － 制度に従い, 自由人として生きよ (2: 13-17)
- － 「僕たるものよ」(2: 18-20)

d 教え ② 模範としてのキリストの受難の意味 (2: 21-25)

「なぜならばキリストも… (ὅτι καὶ Χριστὸς)」(2: 21)

「あなたがたが召されたのはこのため (εἰς τοῦτο γὰρ ἐκλήθητε)」(2: 21)

e 勧告 ③ (3: 1-17) 家庭訓, 一般的な勧告

- － 「妻たちよ」(3: 1-6)
- － 「夫たちよ」(3: 7)
- － 「終わりに」まとめの勧告 (3: 8-17)

f 教え ③ 模範としてのキリストの受難の意味 (3: 18-22)

「なぜならばキリストも… (ὅτι καὶ Χριστὸς)」(3: 18)

救いの意義 (3: 21) ⇔ 1: 3 と対応

g 勧告 ④ (4: 1-11) 迫害下への勧告

- － 武装し, 慎みをもって生活する (4: 1-6)
- － 終わりのとぎのために (4: 7-11)
- 頌栄 (4: 11) 「栄光と力が, 世々限りなく神にありますように, アーメン」

iii 第二部 (4: 12-5: 11)

a 勧告 ① (4: 12-5: 11) 迫害に対する励ましと慰め

- － 「愛するものたちよ (Ἀγαπητοί)」試練の時こそ喜べ (4: 12-19)
- － 「私は勧める (παρακαλῶ)」(5: 1) 長老と若者へ (5: 1-6)
- － 悪魔に備えよ (5: 7-10)

頌栄 (5: 11) 「力が世々限りなく神にありますように、アーメン」

iv 結びの言葉 (5: 12-14)

1.2 書簡の主題, 内容

Iペトロ書の主題は明瞭である。受難のキリストを模範とし (2: 21 他), 苦難のなかにあってもキリスト者として (「ὡς Χριστιανός」 4: 16) の振舞いを示すことである³。書簡全般を通して, 「火のような試練」 (4: 12) と形容される耐え忍ぶべき艱難について何度も言及される⁴。また, バプテスマを示唆する言辞も度々見出せるため⁵, その意義を説くのも主題の一つと考えられる。他の新約文書同様, 同書簡は終末論的背景を持っている。現在の苦しみに対して, 将来の栄光が対峙され (4: 13, 5: 1, 5: 10), 読み手を励ましている。さらに, Iペトロ書にとって, 「聴き従うこと (従順)」 (1: 2, 14, 22, 2: 14) は「選び」につながる (1: 2)。これは, 2: 13 以降, 統治者や主人, 夫などに従うことを告げる具体的は勧告文へとつながっていく。このようなローマ帝国権力への従順を説く言辞の背景には, キリスト教が拡大するなかで統治者と摩擦を起こさず, それをできるかぎり回避し, キリスト教への不信感を払しょくするねらいが存在すると思われる⁶。初期キリスト教文書のなかでIペトロ書のように世俗権力への従順を訓告する文書が存在する一方, 支配者への批判的言辞を記すマルコ福音書や, ローマ帝国を批判するヨハネ黙示録なども存在していることを忘れてはならない。歴史的には, 前者の文書を担うグループが初期キリスト教の主要な組織へと成長していく。ローマ帝国の反逆者として殺害されたイエスの運動が, やがて支配体制に従属し, 組み込まれていく歴史的経緯を批判的に検討しなければならない。

本書簡の内容は, 二つに区分できる。第一部 (1: 3-4: 11) の主たる内容は, バプテスマを基盤とした教え (教理) と生活上の勧告である。教えと勧告を交互に繰り返す形で論

³ もともと「キリスト者」という名称は, ユダヤ人と区別するために生み出されたものだが (元来は他称語), Iペトロ書では対異邦人との関係で自称として用いられている。このような対異邦人として自称「キリスト者」は, 1世紀後半以降, 用いられたと考えられる。保坂, 196頁参照。

⁴ Iペトロ書では「試練 (πειρασμός)」 (1: 6, 4: 12), 「苦しみ (λύπη)」 (2: 19), 「苦難, 苦しみ (πάθημα)」 (1: 11, 4: 13, 5: 1, 9) に直面した際の「振舞い (ἀναστροφή)」 (1: 15, 2: 12, 3: 1, 2, 16) について多くの箇所でも語られる。

⁵ Iペト1: 3, 23, 2: 2, 3: 21参照。

⁶ キリスト教文書においてパウロ書簡にその萌芽がみられるが (ロマ13: 1-7), 紀元後1世紀後半からこの傾向が一層強くなり (Iテモ2: 1-3, テト3: 1, Iクレ60: 2-61: 3), 2世紀以降のキリスト教弁証家に継承される。

が展開されていく⁷。書簡の後半の第二部(4:12-5:11)では、迫害下への励ましと慰めについて語られる。後半部分は後世の付加である可能性も示唆されている⁸。4:11は頌栄で終わっており、4:12以降は迫害への具体的勧告が続くため、4:11までは迫害を知っているが、それはまだ現実に起こっておらず、4:12以降、現実に起こった迫害への励ましと慰めの言葉が付加されたと考えられるからだ⁹。しかし、書簡の途中で頌栄が挿入されても不自然ではなく¹⁰、4:11前後で主題がはっきりと変化しているわけでもない。書簡を通して迫害への勧告という主題は一貫しているため、元来、4:11以降も前半部分と連続していたと受け取る方が正しいだろう¹¹。

Iペトロ書の冒頭は挨拶の言葉で始まり、終結部分も結びの挨拶で閉じられており、古代の書簡の形式に沿って記されていることが分かる¹²。冒頭の挨拶と結語はパウロ書簡のそれと似ている。1:13の「それゆえに(Δὴ)」に続き、命令形を用いた勧告が何度も繰り返される¹³。送り手は「(読者に)勧める」(2:11, 5:1)と度々記し、書簡の最後に再びそれが繰り返されており(5:12)、この回状の内容は勧告の言葉で占められていることが分かる。

パウロ書簡とIペトロ書の類似性について：Iペトロ書の内容の一部はパウロ書簡と共通していると多くの研究者から指摘されている。また、用いられている語句、言い回しもパウロ書簡のそれと共通点が見出せる。冒頭の挨拶と結語の類似点は以下。恵みと平和(χάρις καὶ εἰρήνη)：Iテサ1:1, Iコリ1:3, IIコリ1:2, ガラ1:3, ロマ1:7, フィリピ1:2, フィレモン3。送り手の名前：「Πέτρος ἀπόστολος Ἰησοῦ Χριστοῦ」(Iペト1:1), 「Παῦλος δοῦλος Χριστοῦ Ἰησοῦ」(ロマ1:1), 「Παῦλος κλητὸς ἀπόστολος Χριστοῦ Ἰησοῦ」(Iコリ1:1)。結語：ロマ16:16, Iコリ16:20, IIコリ13:12。平和の挨拶：ロマ15:33, Iコリ16:23。しかし、Iペトロ書がパウロ主義(Paulinismus)を継承しており、パウロ書簡を模して執筆された、ないしはパウロ書簡に依存しているとは論者は考えない。ただし、パウロ書簡(またはパウロが用いた伝承)の何らかの影響を受けていると思われる。二つの書簡の関係について

⁷ 土戸, 153頁参照。

⁸ Vgl. Beare, 6, 162; Perdelwitz, 26-28; Windisch, 76f; 川村, 416頁参照。

⁹ 4:11と12以降の連続性に関する考察は、以下に詳しい。Brox, 24-34(ブロックス, 21-36頁)。

¹⁰ ロマ11:36, ガラ1:5, エフェ3:21, Iクレ20:12, 32:4, 43:6他参照。Vgl. Brox, 202-203(ブロックス, 277-278頁)。

¹¹ Vgl. Conzelmann/Lindemann, 417; Feldmeier, 20f; Vielhauer, 584。

¹² 送り手の名(Superscriptio)：使徒ペトロ, 宛先(Adscriptio)：…選ばれた人々, 挨拶(Salutatio)：恵みと平和が…。Vgl. Klauck, 36f

¹³ 書簡全体を通して現在命令形(6回)より、不定過去命令形(22回)の方が多く記されている。

ては、稿を改めて論じる。Iペトロ書とパウロ書簡との主たる共通点は以下。つまりきの石：Iペト2：4-8（ロマ9：32-33）、権威への従順：2：13以下（ロマ13：1以下）、キリストの苦しみに与る：2：21以下、3：17以下、4：13以下（フィリピ1：29）、悪をもって返さない：3：9（ロマ12：17）、神からの賜物：4：10-11（ロマ12：6以下）、迫害下の倫理：4：12-13（ロマ8：17-18、フィリ3：10-11）¹⁴。

本書簡は特定の受け取り手の名が記されず、小アジアの多くの地域が含まれる広範囲の読者を想定している。I、IIコリント書などのように受け取り手である共同体の具体的な問題について議論するより、どの地域においても起こり得る一般的な問題に関する教えと勧告が書簡の大半を占めている¹⁵。さらに、内容から読み取れる受け取り手は、バプテスマを受けて間もない信者が主である。それゆえ、Iペトロ書は広範囲に分布する不特定多数の読者に向けた「回状（Rundbrief/Rundschreiben）」と思われる¹⁶。

書簡の内容は冒頭にバプテスマを受け、新たに生れ変わることが強調されており（1：3-5）、3：21のバプテスマに関する見解と対応している。その後、試練（1：6、4：12対応）のなかでの喜びが語られるが、これは書簡の後半に展開される迫害下への勧告を予告している（4：1-11）。救済の意義に関する教説を述べた後、「それゆえに（Διὸ）」（1：13）と生き方の指針を示す勧告文が続く。キリスト者への一般的な勧告（1：13-2：10）、社会制度下の振舞いを説く具体的な勧告（2：11-20）、そして、家庭訓（3：1-17）へとつながっていく。勧告の間に模範としてのキリストの受難の意味（2：21-25）の教説を挟む。キリストが模範を示しているゆえ、勧告に従うことを促す。第一部の終わりは迫害を前にした勧告で締めくくられる（4：1-11）。第二部（4：12-5：11）は迫害下での励ましと慰めである。第一部の終結部分の言葉が再び繰り返される。5：11でも4：11と同じように頌栄によって結ばれる。書簡の最後は結びの言葉で閉じられる（5：12-14）。

これまで、Iペトロ書の前半部分（1：3-4：11）は、初代教会のバプテスマの際に読み上げられていた典礼文と推測されてきた¹⁷。Iペトロ書は文体からみると各箇所の相違は目

¹⁴ Iペトロ書とパウロ書簡の関係について、ヘルツァーが詳細に論じている。ヘルツァーはパウロ書簡からの影響に関しては懐疑的な結論を導き出している。Herzer, 257-269.

¹⁵ Vgl. Feldmeier, 22.

¹⁶ Vgl. Schnelle, 453; Goppelt, 44f; Strecker, 71. 「この手紙では、戒告、教示、慰めが向けられている教会の情勢は極めて漠然と、かつ「どこにでも通用可能な (allgemeingültig)」描き方になっているので、たとえ手紙としての特質が多々あったとしても、手紙を受け取ることができる範囲内にあるすべてのキリスト信徒のために、否さらにそれをも超えた人々のために書かれていると考えることができる。」 Brox, 23f (ブロックス, 21頁参照, 一部訳文を変更)。岩隈, 54頁参照, 川村, 416頁。

¹⁷ この仮説を最初に立てたのは、以下の書。Perdelwitz, 1911. Vgl. Selwyn 305-311. 他にも川村, 416

立つが、書簡全体は論理的に構成され、迫害下への勧告という主題も一貫しており、書簡（回状）としての統一性がある。それゆえ、典礼文と受け取る方ことはできないだろう。ただし、本書簡は初期キリスト教の多くの伝承をもとに構成されており¹⁸、そのなかに典礼伝承も含まれていた可能性は否定できない¹⁹。

1.3 Iペトロ書はディアスポラ書簡か

Iペトロ書の冒頭に書簡の受け取り手として「散在し、仮住まいをしている選ばれた[人々] (ἐκλεκτοῖς παρεπιδήμοις διασπορᾶς)」と記されている。ここから同書簡の文学類型を考える際、Iペトロ書をユダヤ教、初期キリスト教文書のいくつかに認められる「ディアスポラ書簡 (Diasporabrief/ Diaspora letter)」の一つとして捉える研究者が多数、存在している。この見解は果たして正しいのだろうか。

ディアスポラ書簡とは、ユダヤ教でエルサレムの権威的存在である指導者から各地に離散した民に向けて記された公の手紙の総称である。これは母なる地 (Mutterland) であるパレスティナとディアスポラのユダヤ人の一体性 (Einheit)、つまり、一つの神の民である意識を強固にする目的がある。ターツによってディアスポラ書簡に関する先駆的な研究がなされた²⁰。辻はターツの分析をヤコブ書にも適用し、ヤコブ書はディアスポラ書簡の伝統を受け継ぎ、その形式を借りつつ書簡 (キリスト教ディアスポラ書簡) を書いたと推

頁。

¹⁸ 書簡前半部分の文体 (1: 3-4: 11) に相違が見出せるのは、用いた伝承が異なっていたからではなかろうか。ホレルは、Iペトロ書はパウロ書簡を含んだ複数の初期キリスト教の伝承に由来していることを説得的に論じている。Horrell (2002), 29-42; ders (2008), 31-42.

¹⁹ Vgl. Schelke, 4-7; Brox, 23 (ブロックス, 20頁参照)。

²⁰ Taatz, 1991. その対象資料としてエレミヤ書 29, エレミヤの手紙, シリア語バルク黙示録 78-87, 第二マカバイ記 1: 1 以下, 同 1: 10 以下, ラビ文献としてバビロニア・タルムード・サンヘドリン 11b, エレファンティネ書簡, バル・コクパの手紙があげられている。ターツの研究を辻と原口が紹介している。Tsuji, 18-27. 辻 (1997), 60-64 頁, 同 (2002), 19-23 頁, 原口 (2013a), 1-13 頁。原口はターツの研究を批判的に展開し、初期キリスト教の文書内には、ユダヤ教の「ディアスポラ書簡のジャンルを意識して採用している」ものがあると分析する。無論、ここではユダヤ教のディアスポラ状況をそのまま初期キリスト教に適用することはできず、ディアスポラ概念の拡張、再定義が必要になる。それゆえ、「初期キリスト教徒のディアスポラ状況は、民族的離散状況とは区別される宗教的離散状況のこと」と定義される。原口 (2013a), 13 頁。なお、原口の二つの論文 (2013a, 2013b) ではターツの名前のすべてを「Taats」と誤記しているが、正確には「Taatz」である。クラインはターツの研究を徹底化し、「誘惑 (Anfechtung)」を「乗り越えること (Bewältigung)」を教示するディアスポラ書簡の特徴を、ヤコブ書とIペトロ書から読み解く研究を行う。Klein, 2011. さらに、デーリングは同種の研究を大規模に展開し、前5世紀から後3世紀までのユダヤ教 (及びキリスト教) 文書内の書簡を網羅的に分析し、ユダヤ教、及び初期キリスト教のディアスポラ書簡を説明している。クライン、デーリングは、Iペトロ書 (及びヤコブ書) もキリスト教ディアスポラ書簡として扱っている。Doering (2012), 434-452.

測している²¹。辻、原口、デーリングらは、Iペトロ書もユダヤ教ディアスポラ書簡の形式をキリスト教化（Christianisierung）させたキリスト教ディアスポラ書簡の一つに分類している²²。

このような見解に対して、批判的な意見も提出されている。そもそも、公的なディアスポラ書簡なる伝統がユダヤ教の文書内に存在していたかどうかという疑問である²³。私見では、辻らが想定するキリスト教ディアスポラ書簡の定義は、ターツによるユダヤ教のディアスポラ書簡の定義をキリスト教的に拡大解釈し過ぎてるように思える。母なる大地エルサレムからの書簡というユダヤ教ディアスポラ書簡の重要な要素は、キリスト教ディアスポラ書簡には適用されていない。仮にユダヤ教の伝統を継承するキリスト教ディアスポラ書簡という文学ジャンルが存在していたとしても、その要素をIペトロ書に見出すのは無理がある。Iペトロ書がディアスポラ書簡の伝統に繋がることを意識させる箇所は、冒頭の一文だけである（1: 1）。ディアスポラ書簡の重要な目的として、ターツが度々強調するのは「一つの神の民」を確認する点であるが²⁴、Iペトロ書にそれを示唆する箇所は見出せない²⁵。迫害下での励ましと慰めの言辞（4: 12-5: 11）は、神の民の結束を促すものと受け取れなくもないが、果たして、世俗権力への服従（2: 13-7）や家庭訓（3: 1-17）などの書簡の多くを占めている具体的な勧告の言葉は、「一つの神の民」を意識することとどのように関係するのだろうか。また、ディアスポラ書簡では離散した民が再び一つになることが訴えられているが（エレ4: 10, 14, シリア・バラク78: 7）、Iペトロ書にはそのような記述はない。Iペトロ書の主たる読者は入信間もない異邦人信者と考えられるが、受け取り手である彼、彼女らが自分たちはユダヤ人のような「ディアスポラの民」という意識が持っていたかどうかも疑問である。さらに、書簡の送り手は「バビロンにいる

²¹ Tsuji, 18-27. 辻 (1997), 57-78 頁, 同 (2002), 19-23 頁。

²² Tsuji, 29-32. 原口 (2013a), 13-18 頁, 同 (2013b), 2 頁。他にも Elliott (2000), 12; Michels, xlvi-xlix; Doering (2012), 434-452; ders (2013), 81-113.

²³ Iペトロ書とシリア語バルク黙示録 78-87 との類似性を指摘しつつ、同書簡を「イスラエル（ユダヤ人共同体）に宛てた黙示的ディアスポラ書簡」と捉えるミヒャエルに対しては、デーヴィッツはこれらの文書はすべて「書簡」であるという共通点以外見出せないとし、「黙示的ディアスポラ書簡」という類型に対して懐疑的見解を記す。Michels, xlvi-xlix; Davids, 13-14. デーヴィッツの批判に対する応答は以下。Doering (2009), 215-236. 同様に、田川はターツがあげた手紙は疑似書簡も含んでおり、「公的」書簡とはいえない点、各書簡は宛先も内容も相違していることを理由にあげている。田川, 95-97 頁。

²⁴ Vgl. Taatz, 104.

²⁵ 確かにIペト2: 10では、ホセア書の言葉（1: 6, 9, 2: 25）を用いつつ「神の民」が引き合いに出されている。しかし、この箇所はかつて神の民ではなかった異邦人信者がバプテスマを受け、いまや神の民になったことを説いているのであり、ディアスポラの民と一つになることを訴えるものとは受け取れない。

[人々]] (5: 1) とある。バビロンはローマを意味する暗号ではあるが(後述 2・2 参照)、ディアスポラ書簡の形式をとっていながら歴史的なディアスポラの場所からディアスポラの民に送る書簡は不自然ではなかろうか²⁶。従って、I ペトロ書を(キリスト教)ディアスポラ書簡の伝統に分類することは困難であると考え²⁷。ここで「散在し、仮住まいをしている選ばれた [人々]」というのは、天上に本来の住まいがあり、地上での生は仮住まいの状態であるという、ユダヤ教から受け継がれたキリスト教徒の自己理解の表現であると考え。I ペトロ書だけではなくヘブライ書 11: 13-16 などにも、それが確認できる。土岐健治は「仮住まい」「寄留者」(I ペト 2: 11, LXX 創 23: 4, LXX 詩 38: 13) などの単語が、70 人訳を経由してキリスト教文書に定着した経緯を説明し、次のようにまとめている。「ユダヤ民族の本質的・本来的なあり方をディアスポラ(とそれに伴う寄留)ととらえ、地上の生はディアスポラすなわち荒野放浪に他ならないとみなし、キリスト教徒は地上の寄留者としてそのような生き方考え方を受け継ぎ、我が身に引き受ける」²⁸ ことである。

2. I ペトロ書の著者、成立時代・場所、受け取り手について

2.1 著者

次に I ペトロ書の著者はどのような人物か考察したい。冒頭の「イエス・キリストの使徒ペトロ (Πέτρος ἀπόστολος Ἰησοῦ Χριστοῦ)」(1: 1) を字句通り受け取るならばイエスの弟子の使徒ペトロであるが、この可能性は極めて低い。多くの研究者が指摘するように、その理由として以下の点があげられる。

- ① 本文のギリシア語: I ペトロ書のギリシア語の語彙は豊富で²⁹、文章構造も複雑であ

²⁶ この点、辻やデーリングは不自然とは考えていない。だが、ディアスポラの地から他のディアスポラの地に送る「ディアスポラ書簡」の「意図」とは何か説明していない。Tsuiji, 29; Doering, 233. そもそも、ディアスポラ書簡であるならば、差出場所はエルサレムであるべきだろう。この点、デーリングはディアスポラ書簡にとって重要な関心は場所としてのエルサレムではなく、一つの神の民の強調であるとする。だが、かつて神の民の都であったエルサレムから送ることによってこそ、そのことが強調できるのではなかろうか(エレ 29: 4, II マカ 1: 1, 10 参照)。Doering, 225.

²⁷ 辻は、I ペトロ書に類出する「παρεπίδημος」(1: 1, 2: 11)「πάρουκος」(2: 11)が LXX においてバビロン捕囚を示唆する単語として用いられていると記している。Tsuiji, 30. しかし、I ペトロ書においてこの二つの単語は、この地上で読者は「寄留者」であり、「仮住まいをしている者」という文脈で用いている。捕囚やディアスポラと直接、結びつくとは思えない。

²⁸ 土岐, 38 頁。

²⁹ 新約文書で I ペトロ書のみ出現する語句(hapax legomenon)は 55 単語。

り、修辭的な用法も多用されている。また、類語や同音語を並列させるなど³⁰、ギリシア語の母語話者によって記されたと考えるのが自然である³¹。アラム語を母語とし、「無学な普通の人」（使徒 4：13）といわれるガリラヤ出身の漁師ペトロが記したとは考えにくい³²。

- ② 聖書の引用：同書簡の聖書の引用は、I ペト 4：8 以外は、全て 70 人訳からの引用である。
- ③ 生前のイエス伝承との関係：生前のイエスと関係づけるイエスの言葉の引用はない。また、殉教を示唆する箇所（4：12 以下）、司牧者として振舞いを記す箇所（5：1 以下、ヨハ 21：15 以下参照）以外に、生前のペトロと結び付く箇所もない。
- ④ パウロ書簡との関係：ペトロと緊張関係にあったと考えられるパウロの書簡との共通点も見出される³³。ペトロがパウロ書簡を参考に本書簡を記したとは考えにくい。
- ⑤ 書簡の内容とペトロの関係性：書簡の中心的なテーマの一つである当時の社会制度にまつわる具体的な勧告（2：13 以下）もペトロとは馴染まない。とりわけ、書簡の成立背景に考えられる迫害の状況も（4：12 以下）、生前のペトロと関係づけるのは難しい³⁴。また、後述するように、成立年代を 90 年代に想定するならば、64 年に殉教したとされるペトロと 30 年近くのずれが生じる。

従って著者として想定されるのは、ペトロを師と仰ぐ教会の指導者であり、「長老の一人、受難の証人、栄光をあずかる者」（5：1）だが、具体的な人物は不明である。書簡の最後に記されている「忠実な兄弟シルワノ」（5：12）は、パウロの協力者シルワノかどうかは不明である³⁵。ローマにおいてペトロ派（Petrine Circle / Petrus-Schule）と呼ばれるような

³⁰ 例 えば、1：10 「ἐξεζήτησαν καὶ ἐξηραύνησαν」、1：4 「ἀμίαντον καὶ ἀμαραντον」、19 「ἀμάμου καὶ ἀσπίλου」。I ペトロ書の修辭的な用法の分析は以下に詳しい。Schelkle, 13.

³¹ Vgl. Schnelle, 446; Goppelt, 45-47. 小林, 380-381 頁参照。

³² ギリシア語が堪能ではないペトロの代わりにシルワノ（5：12）が書いたと想定できるが、「忠実な兄弟」という言葉は自分で自分を讃えることになってしまう。小林, 381 頁参照。Vgl. Brox, 241f (ブロックス, 332-334 頁)。

³³ ペトロとパウロが緊張関係にあったが、その後「和解 (Versöhnung)」したと「想像する (vermuten)」研究者もいるが、確証は得られない。Hengel, 158 (ヘンゲル, 102-105 頁)。

³⁴ 川島は、ペトロがローマに滞在した期間について、以下のように推測している。「ペトロがローマに来たのはローマからユダヤ人の追放を命じたクラウディウス帝が死んだ（54 年 10 月 13 日）後であろう。するとペトロのローマ滞在期間は長くてもその時からネロのキリスト教迫害の中での殉教（64 年）にいたるほぼ 10 年ということになろう。」川島, 191 頁。

³⁵ エルサレム教会からパウロとバルナバと共にアンティオキア教会に派遣されるシルワノ（シラス）

ペトロを崇めるグループが存在し、この一群が本書簡を生み出したと考える研究者らがいる³⁶。シルワノや彼の子（忠実な弟子の意味）マルコ（5：13）が中心となったグループと考えられる³⁷。このようなペトロ派の存在を裏付ける明確な歴史的証拠はないが、1世紀末にローマを中心にペトロを殉教者の模範と仰ぐ一群の集団が存在していた可能性は考えられる³⁸。

Iペトロ書はこのような一群のグループが、ペトロの名を用いて執筆した「偽名書簡」の一つと思われる³⁹。『クレメンスの第一の手紙』では、「柱（στῦλος）」（ガラ2：9）の一人である使徒ペトロの名は、1-2世紀の初代教会における殉教者の一人として言及されている。Iクレメンスには、ペトロとパウロは「私たちの間で最も美しい範をたれた」（6：1）とあるので、ペトロがローマで殉教した可能性は高い⁴⁰。迫害下でのキリスト者の姿勢を説くIペトロの内容からすれば、「多くの苦難を耐え」、「栄光の場」（Iクレ5：4）へと向かったペトロは、ローマで成立したと考えられるこの書簡の送り手として相応しいと考えたのだろう。この偽名書簡の送り手は「柱」の一人であり、殉教者ペトロの名を示しつつ、ペトロとパウロの両者を知るシルワノによって手紙が書かれたことを強調するのはなぜか。推測の領域を出ない考えだが、Iペトロ書の送り手はペトロとパウロの両方の伝統を正当に受け継ぐことを読者に示したかったからではないだろうか。ペトロの名を冠したパウロの書簡に比較的近い内容を持つ回状であれば、より広い読者にとって受け取りやすいと考えたのだろう⁴¹。

は、ペトロとパウロを両方知る人物である。使徒15：22「シラス」（アラム語）、同16：19以下、Iテサ1：1、IIテサ1：1、IIコリ1：19。

³⁶ Vgl. Elliott (1982), 270-280; ders. (2000), 127-300; Knoch, 143-146. なお、ローマのペトロ派に関する詳細な研究史は以下。Horn, 3-20.

³⁷ このマルコを福音史家マルコと同一視するのは疑わしい。エウセビオスの『教会史』（III：39：15）のなかで、ヒエラポリスの司教パピアスが長老ヨハネの言葉として、福音記者マルコはペトロの通訳であったと記されている。だが、これはIペト5：13のマルコがペトロと直接関係したことを示す資料ではなく、むしろ、使徒ではなく福音史家マルコを使徒ペトロと関係づけるために、パピアス（または長老ヨハネ）がIペトロ書の結語の部分に沿って先のことを記したと考える方が自然である。川島, 192-193頁参照。Vgl. Schnelle, 243. この意見に異を唱え、パピアスの歴史的信憑性を重んじるのはヘンゲル。Hengel, 73（ヘンゲル, 52頁）。

³⁸ ホレルはペトロ派の存在に懐疑的な見解を示す。Iペトロ書はローマのキリスト教集団が、使徒的権威を持つペトロの名を用いて執筆したと彼は考える。Horrell, 43-54.

³⁹ 使徒ペトロの名を借りた文書は、『ペトロの第二の手紙』の他にも3世紀頃に成立したと考えられる『ペトロの宣教集』に含まれる『ヤコブへのペトロの手紙』などが挙げられる。初期キリスト教文書におけるペトロの名を冠した偽名文書に関する詳細な研究は以下。Lapham 2003. また、新約聖書の偽名文書に関する説明は以下に詳しい。辻 (2013), 31-63頁。Vgl. Theißen, 147-163.

⁴⁰ ペトロの殉教を示唆するのはヨハネ21：18-19など。川島, 194-212頁参照。

⁴¹ 類似した見解は以下。Theißen, 177.

Iペトロ書の旧約聖書の引用：Iペトロ書に引用された旧約聖書箇所は以下。Iペト 1：16（レビ 11：44，19：2，20：7，26），Iペト 1：24-25（イザ 40：6-8），Iペト 2：6（イザ 28：16），Iペト 2：7（詩 118：22），Iペト 2：8（イザ 8：14），Iペト 2：9（イザ 43：20，出 19：6，イザ 43：21），Iペト 3：10-12（詩 34：13-17），Iペト 4：18（箴 11：31），Iペト 5：5（箴言 3：34）。Iペトロ書の著者は70人訳に精通していることがこれらの引用文から理解できる。自らの発言の根拠として、旧約の引用文を用いることがしばしばみられる。イザヤ書の引用がとりわけ多い。

2.2 成立場所

次に書簡の成立場所についての考察に移りたい。Iペト 5：13 には、送り手からの言葉として書簡の成立場所が示唆されている。「共に選ばれた、バビロンにいる者らと私の子マルコがあなた方に挨拶を送る」（Ἀσπάζεται ὑμᾶς ἢ ἐν Βαβυλώνι συνεκλεκτῆ καὶ Μᾶρκος ὁ υἱός μου）。これを字句通りに受け取り、執筆場所をメソポタミアのバビロン（またはエジプトのバビロン）と考える研究者は現在ではない。成立場所に関して、研究者の間から複数の可能性が提案されている。

- ① 冒頭に記された小アジアの地域（1：1）⁴²
- ② 「バビロン」（5：13）は「ローマ」を示す暗号（「大バビロン（Βαβυλῶν ἡ μεγάλη）」黙示録 14：8，16：19，17：5，18，18：2）⁴³と考えるならばローマ⁴⁴
- ③ 冒頭の「散在した [人々]」（1：1）と関係づけ、「バビロン」を捕囚の身にあるキリスト者のメタファーとして捉える⁴⁵

先述したように、ローマはペトロの殉死の場所でもあり、先のペトロ派の存在を想定す

⁴² Vgl. Schnelle, 447. その理由として、書簡に記された勧告や慰めの言葉は、送り手が小アジアの近状を熟知していることを前提としているとシュネレは説明する。

⁴³ 「ローマをバビロンと呼ぶのは、ローマを話題にしていることをかくすためではなく、ローマの反神的性格を明瞭にするためである。」佐竹，277頁参照（改稿版，149頁）。他にもユダヤ教黙示文学において例が見出せる。Iペトロ書と同時代に成立したIVエズラ3：1以下ではローマをバビロンと重ねている。シリア・バラク 67：7，シュピラ 5：143，159-160「深い海とほかならぬバビロンとイタリアの国々」参照。Vgl. Durst, 422-443.

⁴⁴ 研究者の間ではこの意見が多数である。Vgl. Goppelt, 351f；Knoch, 142f；Brox, 41-43（ブロックス，44-46頁）；Lapham, 145-147.

⁴⁵ Vgl. Zwierlein, 7-12. ②と③の可能性を折衷する案も提出されている。Feldmeier, 27f. 170.

るならば、本書簡を記す歴史的背景として、②の可能性が説得的であろう。同時代に記されたユダヤ教黙示文学においても、ローマをバビロンと関連付けて批判的に記述していることもこの可能性を裏付ける根拠となる。同時代にローマで成立したと考えられる I クレメンズ (90 年代に成立) と I ペトロ書の内容との共通性も見過ごすことができない⁴⁶。また、同書簡はパウロ書簡 (及び疑似パウロ書簡) からの何らかの影響が考えられるゆえ、収集された真正のパウロ書簡集 (Corpus Paulinum) は初代教会の中心地の一つであり、晩年のパウロが過ごしたローマであれば触れることができた想定される⁴⁷。

2.3 成立年代

成立年代は 90 年代から 2 世紀初頭と思われる⁴⁸。以下、その理由を列挙する。

- ① II ペトロ書他との関係：『ペトロの第二の手紙』が I ペトロ書を前提としている (II ペト 3: 1)。また、2 世紀初頭の教父文書も本書簡を知っているため、それ以前であることは確実だろう。また、前述したように、パウロ書簡からの影響が考えられるゆえに、パウロ書簡の成立以後である (50 年代以降)。
- ② 迫害の状況：書簡に記された迫害下の状況 (3: 13-14, 4: 4, 12-16) は、ドミティアヌス帝治世末期 (96 年頃) の帝国内のキリスト教徒への迫害を示唆するものと

⁴⁶ ローマの司教クレメンズ (?-後 101 年) がコリント教会に宛てた手紙の冒頭部分も I ペトロ書の冒頭 (1: 1) と共通性が見取れる。I ペトロ書と I クレメンズの間には、語彙や内容の上で多くの共通点が見出せる。例えば、I ペト 1: 17「ἀπροσωπολήμπτως」(I クレ 1: 3)、長老への従属: I ペト 5: 5 (I クレ 57: 1)、迫害の示唆: I ペト 4: 12 以下 (I クレ 5: 1-6: 4)、キリストは苦難の模範 (ὁπογραμμός): I ペト 2: 21 (I クレ 5: 7, 16: 17)。キリストの受難とイザヤ書の預言を関係づける: I ペト 2: 21-25 (I クレ 16: 3 以下)、頌栄 (διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ): I ペト 4: 11 (I クレ 58: 2, 61: 3, 64: 1, 65: 2)、教会の指導者の役割: I ペト 5: 1-5 (I クレ 40-44)。I ペトと I クレの詳細な比較検討は以下に詳しい。Elliott (2000), 138-140. Vgl. Knoch, 22. なお、I ペトロ書とヤコブ書との共通性も指摘されている。I ペト 1: 1 (ヤコ 1: 1), I ペト 1: 7 (ヤコ 1: 3), I ペト 1: 24 (ヤコ 1: 10-11) 他。I ペトと I クレは二つの手紙がローマで同時代に成立したので、互いに書簡の存在を知っていた可能性は否定できないが、I ペトとヤコブの間にはその可能性は低いだろう。しかし、二つの書簡が同じような伝承を用いた可能性は考えられる。辻 (2002), 43 頁参照。

⁴⁷ 1 世紀末にローマで成立した I クレメンズは、パウロ書簡を知っている。I クレ 47: 1-3 は I コリントを示唆し、また I クレ 32: 1 以下はロマ 9: 5, I クレ 30: 6 はロマ 2: 29, I クレ 61: 1 以下はロマ 13: 1-7 との関係が考えられる。Vgl. Theißen, 141. タイセンはパウロ書簡集 (Corpus Paulinum) の収集の場所としてコリントとエフェソをあげている。また、コリントで収集された書簡集が後にローマに行き着いた可能性を推測している。Theißen, 143-145.

⁴⁸ 成立年代に関しては、研究者によって 30 年近くの開きがある。シュネレは 90 年頃、ゴッペルトは 60-80 年、クノッホは 70-80 年頃、ブロックスは 70-100 年、エリオットは 73-92 年、ヘルツァーは 90 年前後に想定。Schnelle, 448; Goppelt, 64-65; Knoch, 19-24; Brox 41 (ブロックス, 44 頁), Elliott (1982), 87; ders (2000), 136-138; Herzer, 267f.

推測する研究者がいる。この可能性は全否定できないが、ドミティアヌス帝がキリスト教徒を組織的に迫害をしたという歴史的資料はない⁴⁹。また、ネロ帝による弾圧（64年）は本書簡の宛先である小アジアに及んだと考えるのは無理があるため、ネロ帝による弾圧でもないだろう⁵⁰。ドミティアヌス帝による組織的な迫害ではないにせよ、何らかの単発的な迫害を受けていることは書簡の内容から理解できる。その場合、迫害は信者の周囲に存在する者からの局所的なものであろう。このような迫害は常日頃から、どのような地域でも起きえたはずである⁵¹。

- ③ 小アジア伝道：書簡の送り先である小アジア地域の伝道も80年代以降なら可能性が考えられる⁵²。
- ④ バビロンとしてのローマ：ローマをバビロンと表す（5：13）も1世紀後半（エルサレム神殿崩壊以降）の文書から確認できる。
- ⑤ 教会組織：本書簡には教会の職位のひとつとして「長老（πρεσβύτερος）」（5：1）について言及されているが、2世紀以降に確立していった明確な教会組織を前提していない⁵³。

以上の理由から、成立年代を90年代から2世紀初頭と想定するのが妥当だと考える。70年代のエルサレム神殿崩壊を境にして、ユダヤ教の一分派であった「ユダヤ教イエス派」（佐藤研）が、次第にユダヤ教から離れ「キリスト教」として徐々に自己を確立し始める⁵⁴。90年代以降は共同体としての本格的な体制作りに向かう時期である。

2.4 受け取り手

では、最後に書簡の受け取り手について考えたい。書簡の冒頭には1：1「ポントス、ガラテヤ、カッパドキア、アジア、ビティニアの各地に散在し、仮住まいをしている選ばれた[人々]」とあるように、小アジア地域にあるローマ帝国の属州名称が列挙され、広

⁴⁹ 保坂, 285頁以下参照。

⁵⁰ 小林, 379頁参照。

⁵¹ Vgl. Achtemeier, 34-36.

⁵² 書簡の冒頭に記された小アジア地域への伝道は60年代中盤、80年代ならば確実であるとゴッペルトは指摘する。いずれも64年に死んだペトロの死後の年代である。Goppelt, 29.

⁵³ 速水, 411頁参照。

⁵⁴ 佐藤, 144頁。保坂はユダヤ教とキリスト教の分離過程とその時期を詳細に論じている。「ユダヤ人社会内に独立した所謂キリスト教徒の“教団”を、あるいはユダヤ教とは異なる一つの「新しい宗教」を想定することは少なくとも(略)80/90年代異端追放の動きが始まる時点までは避けるべきである。」保坂, 168頁。

範囲な読者を想定しており、これらの地域がパウロの伝道地域と重なる地域（ガラテヤ、アジア）である点も興味深い。受信者は「散在している [人々]」（ヤコ 1: 1 参照）と位置付けられ、地上では「仮住まいの者」（Iペト 1: 1, 17, 2: 11）している存在である。文脈から読み取れるのは、彼、彼女らは異邦人キリスト教徒であり⁵⁵、受洗後まもない人々とも考えられる⁵⁶。社会的身分の低い人たち、すなわち奴隷（2: 18-25）や非キリスト教徒の夫を持つ者（3: 1-7）への勧告の言葉から、受信者が置かれている社会的状況が理解できる。そして、何度も用いられる「苦しみを受ける」（πάσχω）という言葉から、何らかの迫害下に置かれているのは間違いない⁵⁷。書簡を通して、苦難のキリストに倣う生き方が勧められる（2: 21 他）。「キリスト者として」（4: 16）、この苦しみを受けることを促している。

まとめ

これまでの考察をまとめる。受難のキリストを模範とし、苦難のなかにあってもキリスト者としての振舞いを勧めることを主題とする I ペトロ書の内容は、二つに区分できる。第一部（1: 3-4: 11）の主たる内容は、バプテスマを基盤とした教えと生活上の勧告であり、書簡の第二部（4: 12-5: 11）では迫害下への励ましと慰めについて語られる。I ペトロ書の内容と形式から判断すれば、同書簡は広範囲に分布する不特定多数の読者に向けた「回状」と思われる。ただし、一部の研究者らが想定するユダヤ教のディアスポラ書簡の伝統を引き継ぐものとは考えられない。書簡の送り手は不明ではあるが、著者として想定されるのは、ペトロを師と仰ぐ教会の指導者と思われる。成立場所として考えられるのは、5: 13 のバビロンを暗号として受け取るならばローマである。成立年代は 90 年代から 2 世紀初頭と考えられる。また、主たる受け取り手として異邦人キリスト教徒が想定され、彼、彼女らは受洗後まもない人々であり、かつ何らかの迫害下に置かれているのは間違いないだろう。

参考文献

岩隈直訳註『希和对訳脚註つき新約聖書 12 公同書簡 上』, 山本書店, 1986 年

川島貞雄『ペトロ』, 清水書院, 2009 年

⁵⁵ Iペト 1: 14, 18, 2: 10, 4: 3 参照。

⁵⁶ Iペト 1: 3-4, 18-19, 23, 2: 2, 10 他参照。

⁵⁷ 現在、受けている苦難に関する言及は以下 Iペト 1: 6, 2: 19-20, 3: 14, 4: 12 以下。

- 川村輝典「ペテロの第一の手紙」、『総説新約聖書』所収、日本基督教団出版局、1981年、414-420頁
- 小林 稔「ペトロの手紙一」、『新版 総説新約聖書』所収、日本基督教団出版局、2003年、377-385頁
- 佐竹 明『現代新約注解全書 ヨハネの黙示録 下巻』、新教出版社、1989年
 (改稿版 同『現代新約注解全書 ヨハネの黙示録 下巻』、新教出版社、2009年)
- 佐藤 研『聖書時代史 新約篇』、岩波書店、2003年
- 田川建三『新約聖書 訳と註 第六巻 共同書簡／ヘブライ書』、作品社、2015年
- 辻 学「ディアスポラ書簡」としてのヤコブ書 文学類型・主題・読者との関係をめぐって」、『神学研究』(第44号)、1997年、57-78頁
- 『現代新約注解全書 ヤコブの手紙』、新教出版社、2002年
- 『偽名書簡の謎を解く パウロなき後のキリスト教』、新教出版社、2013年
- 土戸 清『現代新約聖書入門』、日本基督教出版局、1979年
- 土岐健治『七十人訳聖書入門』、教文館、2015年
- 速水敏彦「ペトロの手紙 一」、川島貞雄、橋本滋男、堀田雄康編『新共同訳 新約聖書注解II』所収、日本基督教団出版局、1991年、410-431頁
- 原口尚彰「ディアスポラ書簡としての初期キリスト教書簡」、『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』(第31号)、2013年、1-18頁(2013a)
- 「ディアスポラ書簡としてのローマ書」、『人文学と神学』(第5号)、2013年、1-15頁(2013b)
- 保坂高殿『ローマ帝政初期のユダヤ・キリスト教迫害』、2003年、教文館
- 宮田光雄『権威と服従—近代日本におけるローマ書十三章』、新教出版社、2003年
- Achtemeier, P. J., 1 Peter. A Commentary on First Peter, Minneapolis 1996.
- Beare, F.W., The First Epistle of Peter. The Greek Text with Introduction and Notes, Oxford 1947.
- Brox, N., Der erste Petrusbrief, EKK 21, Neukirchen-Vluyn 1979 (N. ブロックス(角田信三郎訳)『ペテロの第一の手紙』、教文館、1995年).
- Conzelmann, H. / Lindemann, A., Arbeitsbuch zum Neuen Testament, Tübingen 2000¹³.
- Davids, P., The First Epistle of Peter, Grand Rapids, Mich., 2009.
- Doering, L., First Peter as Early Christian Diaspora Letter, in: Niebuhr, K-W. / Wall, R. (ed.),

- Catholic Epistles and Apostolic Tradition : A New Perspective on James and the Catholic Letter Collection, Waco, Tex., 2009, 215-236, 441-457.
- Ders., Ancient Jewish Letters and the Beginnings of Christian Epistolography, Tübingen, 2012.
- Ders., Gottes Volk. Die Adressaten als "Israel" im Ersten Petrusbrief, in : Du Toit, D.S. (Hg.), Bedrängnis und Identität : Studien zu Situation, Kommunikation und Theologie des 1. Petrusbriefes, Berlin 2013, 81-113.
- Durst, M., Babylon gleich Rom in der jüdischen Apokalyptik und im frühen Christentum. Zur Auslegung von 1 Petr 5,13, in : Heid., S. (Hg.), Petrus und Paulus in Rom. Eine interdisziplinäre Debatte, Freiburg/ Basel/ Wien 2011, 422-443.
- Elliott, J.H., A Home for the Homeless. A Sociological Exegesis of 1 Peter, Its Situation and Strategy, London 1982.
- Elliott, J.H., 1 Peter : A New Translation With Introduction and Commentary, The Anchor Bible 37B, New York 2000.
- Feldmeier, R., Der erste Brief des Petrus, ThHK 15/1, Leipzig 2005.
- Goppelt, L., Der Erste Petrusbrief, KEK 12/1, Göttingen 1978⁸.
- Hengel, M., Der unterschätzte Petrus, Tübingen 2007² (M・ヘンゲル (川島貞雄訳) 『ペトロ』, 教文館, 2010年).
- Herzer, J., Petrus oder Paulus? Studien über das Verhältnis des Ersten Petrusbriefes zur paulinischen Tradition, Tübingen 1998.
- Horn, F.W., Die Petrus-Schule in Rom : Forschungsgeschichtliche Notizen zur Abfassungssituation des 1. Petrusbriefes, in : Du Toit, D.S. (Hg.), Bedrängnis und Identität : Studien zu Situation, Kommunikation und Theologie des 1. Petrusbriefes, Berlin 2013, 3-20.
- Horrell, D.G., The Product of a Petrine Circle? A Reassessment of the Origin and Character of 1 Peter, JSNT 24, 2002, 29-60.
- Ders., 1 Peter, New York 2008.
- Klauck, H.-J., Die antike Briefliteratur und das Neue Testament, Ein Lehr- und Arbeitsbuch, Paderborn/ München/ Wien/ Zürich 1998.
- Klein, T., Bewährung in Anfechtung. Der Jakobusbrief und der Erste Petrusbrief als christliche Diaspora-Briefe, Tübingen/Basel 2011.
- Knoch, O., Der Erste und Zweite Petrusbrief / Der Judasbrief, RNT, Regensburg 1990.
- Lapham, F.P., The Myth, the Man and the Writings. A Study of Early Petrine Text and Tradition,

- London 2003.
- Michaels, R.J., 1 Peter, WBC 49, Waco, Tex. 1988.
- Perdelwitz, R., Die Mysterienreligion und das Problem des I. Petrusbriefes. Ein literarischer und religionsgeschichtlicher Versuch, Gießen 1911.
- Selwyn, E.G., The First Epistle of St. Peter. The Greek Text with Introduction, Notes and Essays, 1981.
- Schelke, K.H., Die Petrusbriefe, der Judasbrief, HThK XIII/2, Freiburg/ Basel/ Wien 1976⁴.
- Schnelle, U., Einleitung in das Neue Testament, Göttingen 2002⁴.
- Strecker, G., Literaturgeschichte des Neuen Testaments, Göttingen 1992.
- Taatz, I., Frühjüdische Briefe. Die paulinischen Briefe im Rahmen der offiziellen religiösen Briefe des Frühjudentums, Göttingen 1991.
- Theißen, G., Die Entstehung des Neuen Testaments als literaturgeschichtliches Problem, Heidelberg 2011².
- Tsuji, M., Glaube zwischen Vollkommenheit und Verweltlichung. Eine Untersuchung zur literarischen Gestalt und zur inhaltlichen Kohärenz des Jakobusbriefes, Tübingen 1997.
- Zwierlein, O., Petrus und Paulus in Jerusalem und Rom. Vom Neuen Testament zu den apokryphen Apostelakten, Berlin 2013.
- Vielhauer, P., Geschichte der urchristlichen Literatur : Einleitung in das Neue Testament, die Apokryphen und die Apostolischen Väter, Berlin 1975.
- Windisch, H./ Preisker, H., Die Katholischen Briefe, HNT 15, Tübingen 1951³.